

2018年2月25日川越教会

ろばの子に乗って

加藤 享

[聖書]マルコによる福音書11章1～11節

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

[序] 先頭に立って進む主イエス

月日の経つのは早いですね。クリスマスをお祝いして、早や9週間経ちました。主の復活を祝うイースターは4月1日、5週間後です。聖書教育の教案では、今日は、十字架が待ち構えているエルサレムに向かっていく、主イエス・キリストの**印象深いお姿**を学びました。もう一度振り返ってみましょう。

先ずマルコ福音書の10章32節以下をご覧ください。「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは**先頭に立って**進んで行かれた。それを見て、弟子たちは**驚き**、従う者たちは**恐れた**。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の

身に起ころうとしていることを話し始められた。今わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで**殺す**。そして、人の子は三日の後に**復活する**。」

大切な**逾越し祭**が近づいていました。春分から最初の満月の晩に**小羊を屠り**、その血を家の入り口の柱に塗ることで、エジプトに下す神の裁きから守られて、奴隷の地エジプトから脱出できた**神の恵み**を感謝する**祭**です。エルサレムの神殿で祈りを捧げようとする人々も大勢、街道を歩いていたことでしょう。主イエスも**都に上ると**、おっしゃったのです。弟子たちと都エルサレムへ上るのは、主にとって**初めての**ことです。しかも先頭に立って**毅然とした態度**で進んで行かれます。そのお姿に、弟子たちは**驚き、恐れ**ました。

すると主は弟子たちを呼び寄せて、エルサレムでご自分がどのような仕打ちを受けるかを、予告されました。**三度目の予告**です。第一回目は、ペテロが「**あなたはメシア**です」と告白できた時でした。ペテロは、驚いて主をいさめ始めて、厳しく叱られています。マルコ福音書はこの重大な予告を、8章9章10章に、続けて3回、記しています。

しかし弟子たちには、主がこのように**繰り返し**語られる**受難の予告**を、どうしても**理解出来ませんでした**。3回目の予告の後でも、ヤコブとヨハネ兄弟は「栄光をお受けになる時、私たちをあなたの右と左に座らせてください」と自分たちの**立身出世**を願い出て、他の10人を憤慨させています。

そうです。ガリラヤからは、5000人の空腹を満腹させた**パンの奇跡**を経験して、このような人に**王になってもらおう**と騒いだ人たち（ヨハネ6：15）も、ついて来たことでしょう。此処に来るすぐ前に通り過ぎた**エリコ**の町では、徴税人の頭ザアカイが回心しました。そして、目を癒されて救われた盲人の乞食も、主の後に従いました。こうして主イエスの前や後には、期待に胸をはずませた大勢の人々が、つき従っていたと思います。

[1] 子ろばに乗って

エルサレムの郊外、**ベタニア村**に近づいた時のことです。**突然**、主は二人の弟子にお命じになりました。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない**子ろば**のつないであるのが見つかる。それをほどい

て、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』とつたら、『**主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります**』と言いなさい。」

二人が、出かけて行くと、表通りの戸口に**子ろば**がつながれていました。彼らがほどいていると、居合わせた人々が、「どうするのか」と尋ねました。「主がお入り用なのです」と言うと、許してくれました。二人が**子ろば**を連れて来て、その上に自分の服をかけ、主をお乗せしました。人々は、自分の服や葉のついた枝をとってきて、道に敷き、道端に跪きました。これは**国王を迎える時の作法**です。そして主の前を行く者、後に従う者は、口々に叫びました。

「**ホサナ**。主の名によって来られる方に祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に祝福があるように。いと高きところにホサナ。」 **ホサナ**とは「どうか私たちを救ってください」という意味のヘブライ語です。続く言葉を、聖書教育はこう解説していますね。「ハレル歌集の一部で、詩編118編の引用。エルサレム**巡礼の際によく歌われた賛歌**だったようです。しかしその後の言葉は旧約聖書には見当たらない言葉です。殊に**ダビデを我らの父**——と表現するのは珍しいので、これは巡礼者の口から出て来た**自由な賛美**でしょう」
いずれにせよ、大勢の民衆は、**待望していた新しい王**がいよいよエルサレムに入城されると思ひ込んで、喜び迎え、また従ったのでした。

さてここで、はてなと**戸惑う表現**に出会います。**マタイ福音書**では、主が「一緒に子ろばのいるろばを連れて来なさい」（21：2）と命じておられます。そして「ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはその上にお乗りになった」（21：7）と記します。では**母ろばと子ろば**のどちらにお乗りになったのでしょうか。「**その上に**」という言葉が**複数形**なのです。弟子たちは母と子のどちらにお乗りになってもよいように、両方の背に自分たちの服をかけたのでしょう。でも主がどちらに乗られたかははっきりしません。

ちいろば牧師で有名な**榎本保郎師**は、主を乗せた母の後からついて行く子ろばの絵を見て、「それが自然だなと思った」と書いています。「母ろばは、召し出された時に我が子のことが心配だったと思う。でも子ろばは母の後に従って行った。これなら一安心。私たちもいろいろな問題を抱えて主イエスに従って行く。時には子ろばを捨てて、主イエスの後に従って行かねばならない時が来るかもしれない。でも主のみ旨に従って生きていくなれば、主は我が子をも導いて主の道を歩ませて下さるのだ」

ところが、一番古いマルコ福音書では、「**まだ誰も乗ったことのない子ろば**のつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい」と主は命じておられます。ルカ福音書もそれに従っています。ここで強調されているのは、**まだ誰も乗ったことのない子ろば**です。しかし子ろばといっても、もう家の戸口につながれているのですから、母のそばに身をよせている幼い子ろばではありません。もう一人前に成長し、いよいよこれから**働き始める**ろばですね。としますとこの子ろばは、生涯の**初仕事**として、主イエスのエルサレム入城に用いられるという光栄に浴したのです。何という**嬉しい恵み**でしょうか。こう考えますと、若い者に**記念すべき生涯の第一歩**をお与えになって祝福された主イエスの**優しさ**に、私は深い感動を覚えました。

[2] 平和をもたらす王として

では主イエスは、どうしてわざわざ**子ろば**を選んで、エルサレムに入城されたのでしょうか。それは主の心に中に、旧約聖書の終りから二番目に記されている**ゼカリア書の預言**があったからでしょう。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、**あなたの王が来る**。彼は神に従い、勝利を与えられた者、**高ぶることなく**、ロバに乗って来る。**雌ろばの子であるろばに乗って**。わたしはエフライムから**戦車**を、エルサレムから**軍馬**を絶つ。戦いの弓は絶たれ、**諸国の民は平和を告げられる**。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」(9：9～10)

このゼカリアの預言は、世界から戦車・軍馬・弓を絶つ**平和の王の到来**を告げています。主はご自分がこの預言通りに、軍馬にまたがり強力な武力で平和を打ち建てる王ではなく、**子ろばに乗って戦争をなくしていく王**であることを、はっきりとお示しになろうとしたのでした。

ではどのようにして、**平和を打ち建てる**のでしょうか？ 主ご自身が弟子たちに繰り返し予告された通り、ユダヤ教の指導者たちに捕らえられて、死刑を宣告され、異邦人のローマ総督に引き渡されて、**十字架刑**に処せられ、三日後に墓より**復活**されることによって、真の平和を打ち建て、地の果てまでも**平和の支配を及ぼす王**になると、おっしゃったのでした。

このような平和は、**人の心に思い浮かびもしない平和**でした。ですから「ホサナ、ホサナ」と歓迎した人々が、程なく主から離れて行ったのでした。でも皆さん。人々は過越しの祭を祝うために、エルサレムに集っているのです。

過越しの祭とは、エジプトの奴隷にされていたイスラエルの民が**救い出された恵み**を記念する祭ですね。世界帝国エジプトの軍馬、歩兵の大軍に、紅海の手辺で追い詰められた時、神は激しい東風をもって海を押し返し、モーセの差し出す杖の合図で、**海を分けて道を造り**、イスラエルの民を向こう岸に渡らせ、再び海を元に戻して、追って来たエジプトの大軍を海の中で滅ぼしてしまいました。強力な軍隊が、モーセの杖一本に負けて、滅んでしまったのです。

弟子たちの先頭に立ってエルサレムに乗り込んで行かれた主イエスをお乗せした**子ろば**。それは出エジプトの時の**モーセの杖**に当たるのではないのでしょうか。どうして杖一本でエジプトの大軍が滅んだのか？ **神の偉大な救いの力**が働いたからです。子ろばに乗ってエルサレムに入城し、**十字架**にはり付けされて死なれた方が、どうして**平和をもたらす真の王**になるのか？**神が**、全ての人を救おうとされて、この世に送って下さった**救い主**だからです。

あの時「ホサナ、ホサナ」と歓喜した人たちは、このことを理解できませんでした。ですから、折角**過越しの祭**に集りながら、**出エジプトの恵み**の核心を掴めなかったとは、何とも残念です。でもペテロ始め弟子たちですら主イエスが十字架につけられると、恐れ之余り身を隠してしまいました。彼らが十字架の福音を理解できたのは、**復活の主**に出会ったからです。ですから、**復活節**は本当に大切です。

[結] 真の平和をもたらす救い主

今、平昌で**冬のオリンピック**が行われています。孤立している**北朝鮮**も代表選手を送って、韓国と合同して参加しています。とても良かったと思いますが、でも、代表団を派遣する前に、平壤では**大軍事パレード**を行って、自国の武力を世界に誇示していました。あれを見ていると、私は小学校時代の強烈な思い出が蘇ってきます。

戦争中、新聞やニュースで報道される**天皇**は、いつも胸に大勲位菊花大綬章という最高の大きな勲章をつけた軍服姿で、白馬にまたがり、陸海空の三軍を統帥する**大元帥陛下**でした。小学生時代、朝霞練兵場の観閲式に行く天皇の車を見送るため、池袋東口の道路に30分も前から整列し、あっという間の通過に**最敬礼**をさせられました。

学校の正門と玄関の間には、**奉安殿**という神社風のコンクリート製建物が据えられ、**天皇皇后の写真**（御真影）と**教育勅語**が納められていて、登下校の

際に帽子を脱ぎ**最敬礼**を捧げなければ、厳罰に処せられました。御真影と教育勅語は紀元節、天長節等の式典の時、校長・教頭先生がモーニング姿と白手袋で取り出して、式場の講堂正面に飾り、教育勅語を朗読。**全員は起立**して頭を深くたれ、身動きせずに聞きました。それが戦後2年、新しい憲法が施行されるや、**背広に中折れ帽子姿**で全国を巡回し、時に帽子を手にかざして歓迎に応える**平和のシンボル**、親しまれる天皇に様変わりしたのです。

私たちには、ともすると、軍馬にまたがり、**戦車や軍隊を従えて進む王**に惹かれていく心を持っているのではないのでしょうか。**外観のみすぼらしさ**に惑わされて、馬と比べて**ろばを卑しめ、小さな者を見下す**思いがあるのではないのでしょうか。

しかし**主イエス**は、あえて**子ろば**を選び、それに乗ってエルサレムに向いました。そして**権力者たちの妬み憎しみ**や、キリストなら先ず自分を救えと**罵る民衆の罪の一切**を我が身に引き受けて、**十字架で贖いの死**、愛と赦しの死を遂げて下さいました。そして神は、そのキリストを墓から**復活**させて、**神の救いの御業**を現わしてくださいました。

軍馬から、即ち権威や武器からは、**平和は生まれて来ない**のです。高ぶることなく、**子ろばに乗って十字架に向かう王**、私たちのために十字架にご**自分の命を捨てて下さる王**のみが、憎しみを愛に、恨みを赦しに変えて、**真の平和**をもたらして下さるのです。このお方、**イエス・キリスト**を**平和の王**、**救い主**として、心に迎えましょう。そし一人ひとりが、このお方から、罪の赦しと真の愛を頂きましょう。その愛に導かれて、周りの方々に仕えていきましょう。

祈ります：父なる神さま、あなたの御名を心からほめたたえます。今朝もこのように礼拝を守ることが出来ました。感謝いたします。願いつつも集えなかったお一人お一人をお守りください。私たち日本人は、武力を強化してアジア諸国を侵略支配し、自他ともに、おびただしい人々の命を奪う大きな罪を犯しました。その罪を、心から悔い改める者にして下さい。武器をもっては、真の平和は生まれません。十字架の死が待ちうけているエルサレムに、子ろばに乗って進んで行かれた**主イエスの愛**を、どうぞ私たちの心にしっかり戴く**信仰**をお与え下さい。心を低くして、周りの方々に仕えていく愛を、お与え下さい。イエスさま、聖霊のお導きをお願いします。殺し合う戦争をどうぞ止めて下さい。主イエスさまの御名によって、お祈りいたします。　　アーメン。